

## 名古屋市博物館展示・収蔵環境等設計委託に関する検討会議 第5回

日時：令和6年2月1日（水）14時00分～15時40分

場所：名古屋市博物館4階第2会議室

検討委員：（五十音順）

河西秀哉（名古屋大学大学院人文学研究科 准教授） 会議出席

黒澤浩（南山大学人文学部人類文化学科 教授） 会議出席

半田昌之（公益財団法人日本博物館協会専務理事） WEB出席

真島聖子（愛知教育大学教育学部学長補佐 未来共創プラン担当） 会議出席

安井奈美（社会福祉法人名古屋市身体障害者福祉連合会） 会議出席

傍聴希望者：1名

事務局：名古屋市博物館（以下、本文除き博物館と略す）、（株）丹青社（業務受託者）

### 1. 開会

事務局：それでは時間になりましたので、第5回名古屋市博物館展示・収蔵環境等設計委託に関する検討会議を始めさせていただきます。本日傍聴の方が1名いらっしゃいまして、2番の議事から入っていただきます。最初に小林館長よりご挨拶をお願いいたします。

博物館：改めまして、昨年4月に就任いたしました名古屋市博物館長の小林でございます。どうぞよろしくお願いいたします。委員の皆様方におかれましては、御多忙の中、第5回名古屋市博物館展示・収蔵環境等設計委託に関する検討会議にご出席を賜り、心より御礼を申し上げます。会議に先立ち、四、五分、ご挨拶させていただきます。

御存じのとおり、私ども名古屋市博物館は、1977年の開館以来初となる大規模なリニューアルに向けまして、逐次準備を進めております。昨年10月には休館いたしまして、今後、収蔵品の移設作業が本格化いたします。こうした中、昨年度の基本設計から今年度の実設計に至る2年間にわたり開催してまいりました展示検討会議も、本日をもって最後となります。これまで、委員の皆様方には設計における展示構成、展示設備、また解説などにつきまして、御専門の立場のみならず、幅広い視野から大変貴重なご意見を頂戴してまいりました。リニューアル改修ということもございまして、全て一から自由にできる、そういったわけではございませんが、先生方のご意見をできる限り設計に反映しながら、改修後の博物館のコンセプトでございます「名古屋の歴史文化から『未来をつくる博物館』」、これを目指してまいりたいと考えています。

また、本日は新たにお諮りする議題もありますので、率直なご意見をいただければ幸いです。この会議は、先ほどご案内がありましたように、本日をもって最後となるわけではございますけれども、来年度以降、工事の進捗につきましては、折を見て、またご報告いたしますので、引き続き博物館のリニューアルに御指導、御鞭撻をいただければ幸いです。本日はどうぞよろしくお願いいたします。

### 2. 議事

議題1—前回の主なご意見と対応状況(資料1)

事務局：ありがとうございます。それでは、ここから議事に入りたいと思います。傍聴の方にも入っていただきます。まず前回の主なご意見と対応状況についてご報告をお願いいたします。

博物館：学芸課長の瀬川でございます。どうぞよろしくお願いいたします。議題1、前回の主なご意見と対応状況ということで、資料1をつけさせていただきました。前回の会議の場でお

答えしたことも多く、議事録から転載したものが多くございます。その中で、後の議論にも関わるところとして、6番、壁面ケースの床の高さは700mmでもよいのではないかとのご意見がございました。こちらに関しては、模型を作り、高さを変えての検討や車椅子を使われている方にも見ていただくなどして、650mmの高さを基本にしつつ、展示資料や状況によって高さを変えるということで現在設計を進めています。その他は、ご覧いただければと思います。

事務局：ありがとうございます。ご質問などはよろしいでしょうか。それでは議題2についてご説明をお願いします。

#### 議題2—常設展シナリオ・展示項目計画および平面計画の報告（資料2～4）

博物館：資料2は、これまで何度もご検討いただいたもので、イメージ図につきましても、前回の会議で一通りご覧いただいたものを、少しバージョンアップしています。後ほどご紹介するICTの活用を積極的にしようという計画になっていますので、絵の方もタブレットやスマートフォンを持っている人が増えているというのが主な変更点です。

続きまして、資料3が平面図です。こちらも、一番初めにご提示させていただいてから、通路幅の問題や短絡路、休憩場所等について多々ご意見をいただきまして、前回でほぼ議論も深まっておりましたので、大きな修正はございません。展示ケースの中の展示品などを詰めている状況ですが、この辺りは施工やその後の展示作業で変わる部分もございますので、詳細は省かせていただきます。2ページ目、こちらの4階、旧3階の部分、一番初めの「人類の到達」から始まるところで、全体が水色になっている部分が、いわゆる壁つきの展示ケースで、部分的に水色がある部分が露出展示で、ガラスやアクリルケースがあって、個別に見ていただくものです。環境的に影響があまりないものや、大型の資料に関しては、カバーがない状態で、できるだけ資料を間近に見ていただけるような展示を考えています。また、「II尾張の誕生」の辺りでは、真ん中に空間をつくりまして、イベントや臨時的な展示が行える広場を設けています。「尾張の誕生」や「中世の寺社とまち」、「秀吉の天下統一」などのコーナーに設けており、最後の近代の部分でも展示やイベントが行えるように考えています。

続いて資料4です。これまで、手狭ではないかといったご議論をいただいている中で、どれぐらいの人に対応できるのかを検証しました。これまで常設展示室のストーリーのある部分で数値を出していたのですが、今回は3階の特集展示室の面積も入れて算出しています。Aはそれなりに人がいながらも、ゆったり見ていただける状態、Bは少し窮屈で、時には待つといった設定にしています。合計でいきますと、Aは383人に対応でき、現在は278人ですので、100人以上増えた状態で、かなりゆとりを持ってご覧いただけると考えています。こちらは、数字の訂正になります。

安井委員：確認ですが、エスカレーターはどうなりましたでしょうか。

博物館：エスカレーターはこちらの図面にも出ておりますが、一応、上下両方向で1階から2階、2階から3階に接続できるようにしています。

安井委員：分かりました。

#### 議題3—解説計画の検討（資料5）

博物館：それでは、資料5をご覧ください。前ははまだ煮詰まってない状態でしたが、現状こういった考え方で多言語対応などをしていこうと考えています。最初に前提として、3ページをご覧ください。前回、第4回の検討会議の翌週に、外国人留学生の方に、閉館中の常設展をご覧いただいて、ご意見をお聞きする機会がございました。外国人留学生15名の方に来ていただきました。あえて英語圏ではない方が主になっており、こちらの内訳の方々を

対象に行いました。調査の流れとしましては、概要説明の後に展示室をほぼ自由にご観覧いただき、質疑応答をして、調査票に記入しました。また、個別にヒアリングを行いました。その調査結果を少しご報告いたします。

まず、調査結果1、翻訳に関してですが、現在の常設展の中でも、テーマ解説などはもう十数年以上前に、翻訳を委託して英語・韓国語・中国語を設けていたのですが、特に韓国の方から、間違いがあるとか、伝わりにくい表現がある、あまり使わない表現だ、などのご指摘をいただいています。日々の運営の中でも時々海外の方からそういった指摘がございました。②として、特に英語を重視する意見が多いとまとめています。英語が母国語ではないけれども、英語があればそれなりに分かるので、そこが充実しているほうがよい、というご意見でした。

続いて調査結果2になります。多言語解説ツールに関して、どういったツールを使っているかをお聞きしています。電子辞書というのもあるのですが、スマートフォンでグーグル翻訳などを使っているという方が圧倒的に多くございました。スマートフォンで見られる外国語版の解説ページについては、これもぜひ使いたいというご意見が多くありました。使わないという方もいらっしゃいまして、そういう方は集中して展示を見たい、そういったものは後でよいというようなご意見でした。こうしたところから、2次元コード等で多言語解説を提供することに需要や期待はあると考えています。また、外国語による音声読み上げサービスについては少し意見が分かれており、どちらとも言えないという方が多くいらっしゃいますが、ぜひ使いたいというご意見が半分近く、使わないという方は先ほどと同じようなご意見でした。

こういったご意見も踏まえて、1ページをまとめています。グラフィックの大テーマや章立ての解説に関しては、日本語・英語・中国語（簡体字）と韓国語、その他に関しては日本語と英語を想定しています。黒字部分については、人による翻訳を行うことを考えています。それをういつつ、Aとしまして、解説2次元コード、ウェブ上での展開を考えています。大テーマに関しては、グラフィックから日本語・英語・中国語（簡体字）・韓国語を転用し、その他に関しては、日本語と英語は人による翻訳を行います。その他言語に関しては、青字の部分は自動翻訳で、基本は英語から翻訳を行います。この英語も日本語を単純に英語にするのではなく、日本文化にそれほど造詣が深くない方でも分かりやすい日本語をつくって、さらに英語に翻訳することを考えています。正直なところ、10年、20年展示を行っていきますと、どうしても文章も変わっていくところもございますし、そういったときに、全部また翻訳ができるかという、なかなか経験上も無理ですので、自動翻訳の正確性もだいぶ上がっていますので、これが現実解かなと現状では考えています。また、映像コンテンツについては、基本は日本語、テロップで英語対応を考えています。映像の中に埋め込んでしまうため自動翻訳が使えませんので、この辺りが限界かなと考えていますが、情報検索は、上記と同じ考え方になっています。その他、館内の「観覧・コース案内」や、「市博で学ぶ！」というコンテンツに関しても、ウェブ上で展開できるものについては、自動翻訳を使っていく予定で、音声読み上げやルビも自動で行う機能を使って情報を提供していこうと考えています。また、点字、手話に関しても、なかなか全てというわけではいきませんが、大テーマやグラフィックの一部、また、特に今回触っていただく展示というのも考えていますので、その辺りは点字をきちんとつけ、映像の中では手話でお伝えできるような形をつくっていこうと考えています。次のページはさらに詳細を記載していますが、こちらは説明を省かせていただきます。

事務局：ありがとうございます。ここまでで、ご意見をいただければと思います。

黒澤委員：1ページ目で、青色のところにはネパールの言葉がかなり入っていますが、これはネパールの人たちの需要が多いというリサーチがあるのですか。

博物館：一応、名古屋市に在住の方などのデータを受けつつ、上位層から取り入れているという形になります。逆に、ドイツ、イタリア、フランスというのはそれほど多くないのですが、この辺りは外国人旅行者などを意識しています。

黒澤委員：少しヨーロッパ言語に偏っている感じがするので、バランスというのもあったほうがよいのかなという感じはしますが、それはお任せします。あと、音声読み上げが多くありますが、何か所ぐらい作るのですか。1つの展示室で音声読み上げが錯綜すると、かなりざわざわしてしまうのではないかと。

博物館：音声読み上げに関しては、基本的にはスマートフォンで、個人それぞれの方が使うことを想定しています。

黒澤委員：イヤホンなどがなく、あちこちで音声を聞くとすると結構気が散ると思うのですが。

博物館：その辺りは、まだきちんと詰まっておりませんが、私の知っている例ではイヤホンの貸出しをされている館もごございます。ここは内部でも議論はしていないので個人的な見解になりますが、常設展の通常のコースに関しては、それぐらいのにぎやかさも許容できるような展示になるのではないかと考えています。

博物館：いろいろな催しを行うほか、モニターには動画もありますので、ある程度、集音性のあるものを使いますが、その辺りは今後検討していきたいと思います。

事務局：他はいかがでしょうか。

河西委員：私などはエアポッズを持っていて、今の人は結構持っているかなとは思いますが。

博物館：持っていらっしゃる方はそれでということになります。イヤホンジャックがないスマートフォンも増えていますので、どこまでできるかは検討します。

河西委員：別の話になりますが、今の英語は業者に頼んでいても結構間違いがあるということですか。今までの展示のことですよね。

博物館：今まであったものです。

河西委員：これは結構まずい話で、どういうふうに翻訳業者とやり取りをしたのかというのは残っているのでしょうか。

博物館：十数年前のことで、もう残っていないです。

河西委員：なぜこういうことを言うかということ、一つ懸念が。私もたまたま最近国際会議を行ったときに同時通訳があって、何日も前に原稿を出して、その後、同時通訳者と何度も何度もやりとりをしました。特に専門用語なので、日本語の意味について詳細な問い合わせがあり、それによって訳が違ってくるということでした。何度もやり取りが必要だったので、上がってきたものをすぐそのままというのではなく、ネイティブの方にチェックしてもらう必要があると思います。英語をベースに自動翻訳するというので、間違った英語で自動翻訳されてしまうと、二重に間違いになってしまうので、英語の翻訳については、専門家を入れるとか、結構近年は外国人の日本史研究者もたくさんいるので、そういう人にも読んでもらうことが必要なのかなと思います。英語翻訳の業者や英語の専門家ではなくて、日本史を英語でやっている人たちもいるので、そこに声をかければよいのかなと思っています。

博物館：ありがとうございます。もうおっしゃるとおり、本当にその正確性の担保というのはかなり難しく、英語も私はもう全くなのですが、ほかの言語になると、専門用語のチェックができる人が本当にいるのかということもなかなか難しいところがあります。「自動翻訳をします」というのは、必ず表記することになりますので、その辺りはリスクヘッジというところなのですが、認識していただいた上でやっていこうかなという形です。ただ、おっしゃるとおり、英語の正確性というのは大事になると思います。

黒澤委員：手話も実は専門用語は手話にはないというのがあります。その辺も難しいところですね。

博物館：その辺りは、つくる段階になりましたら、またご相談させていただきながら。

安井委員：もう一つ、ルビ振りも自動という話ですが、例えば私がルビを振るときにとっても苦労するのが人名、地名なのですが、その辺りは自動に任せて大丈夫なのでしょう。

博物館：今考えているのは、一応辞書登録ができるもので、人名は辞書登録をする、また難読のものに関しては括弧づけで書いておくことを想定しています。自動なので間違っただけのルビが振られる場合もあるのですが、そういったところで回避していくことを考えています。最近、名古屋市のホームページをはじめ、自動ルビ振りを採用しているところが増えてきているので、それに倣いながら進める予定です。恐らく固有名詞はなかなか難しいと思いますが、その他のものに関しては今後もさらに精度が上がっていくと思っています。

安井委員：河西先生がおっしゃっていたように、専門用語の翻訳はとても難しく、私も実は産業翻訳を一時やったことがあるのですが、用語の統一というのを徹底したほうがよいと思われるので、用語集を先に専門性のある方につくっていただくという方法も一つかなと思います。だからといって、英語が分からなかったらそれも問題なので、英語もきちんとしていて、さらに日本語もきちんと。やろうと思ったらそれぐらいの手段は必要かなと、お聞きして思いました。

博物館：用語集というのは日本語でということですか。

安井委員：例えば、「日本語に対応する英語はこれです」というものです。恐らく普通の辞書には全く載っていないような話になってくると思います。説明的な英語になる場合も恐らく出てくると思うので、そのときに、同じものを指しているのに、ばらばらした表現にならないように統一するためのものです。

博物館：ありがとうございます。

黒澤委員：グラフィックにこれだけの言葉をどうやって入れるのですか。今、4言語出ていますが、あそこにあるサンプルのようなイメージですか。

博物館：こちらは別のグラフィックで、日本語と英語のみになります。4言語になるのは大テーマで、大型のパネルになりますので、何とかデザインでカバーしようと思っています。

黒澤委員：なかなか場所をとりますから。

博物館：そうなんです。大テーマ以外は、4言語もしくはそれ以上入れようと思っても、さすがに煩雑といえますか、難しいだろうなと思っています。

#### 議題4—I C T を活用した情報提供についての検討（資料6）

博物館：こちらも前回少し頭出しはさせていただきましたが、きちんとした形でお示するのが今回が初めてで、今回のメインになると考えています。まず、I C Tの活用の目的と効果を1ページ目にまとめています。「展示面積の制約を超えて、さらなる情報発信を叶える」また、「博物館のより多くの楽しみ方・学び方を提供できる」としています。効果としては、1、2、3に分けています。まず、来館中の人にとって、誰でも展示内容が分かるように、自身のスマートフォンやタブレットを利用していただく。それぞれの楽しみ方や学びに個別に対応でき、また、体験性や参加性が向上できるのではないかと考えています。館外や様々な遺跡、他の博物館など、観光にも資する周遊の促進になるのではないかと考えています。2つめが、来館していない人にとっての情報発信です。館の中でというのがこれまでの情報発信でしたが、今回特に意識しているのは、いつでも、誰でも、どこでも、どこからでも情報を受け取れるようにするということです。新型コロナウイルスの対策で、休館時に博物館からの情報発信がホームページとSNSで少しずつしかできないということを経験し、こういったことが博物館の使命として必要なのではないかと考えています。また、展示室の中で学ぶといっても、そこで何時間も立ったままとか、多少今回座る場所も増やしていますが、難しいところもありますので、事前学習や事後学習などもできるのではないかと考えています。

また、博物館にとっても、情報というのはどんどん変わっていきます。歴史の情報というのも実はどんどん変わっていきまして、もう10年もたてば学説が変わっているということもありますので、更新性もメリットがあるのではないかと。学校教育に寄与していくことも、博物館の大きな使命となっています。こういった情報がどんどん発信されることで、研究の促進もできますし、大学生や研究者の方の研究支援にもなるのではないかと思います。次頁にその辺りを少し絵で示しています。「1. 来館中の人」に対しては、解説グラフィックの中に、基本的には2次元コードを埋め込みまして、それでアクセスするとウェブ上の情報に飛ぶということを基本的な考え方としています。そういった2次元コードがなくても、「2. 来館していない人」は、館のホームページを窓口として、そこから常設展に関する情報発信のページに入って、様々な情報を得るということを考えています。

さらに詳しく示したのが3ページです。例えば、解説グラフィックや床地図、床に絵図があって、それを見ていただく。今でも常設展の前に、30年ほど前の名古屋市の航空写真がございしますが、例えばこの2次元コードを読んだらその場所の情報が分かるといったことを考えています。昔の絵図であれば、絵図の中に埋め込んだ情報を読み取ると、何が書かれているかがわかるというものです。また、資料キャプションの中の2次元コードを読むことで、その資料の解説のページに飛び、ウェブを利用して自動音声や自動で多言語に翻訳することを想定しています。また、特選の資料、注目していただきたい資料に関しては、より詳しい情報を加えていく予定です。提供するためのデザインが重要になると思いますが、そこに関しては来年度以降の施工段階で詰めていきます。

Bとして、館内・観覧コース案内を考えています。検討会議でもご意見をいただきましたように、いろいろ問いかけをして、それに対して学び、自分たちで考えてもらう。いろいろな見方や考え方があるといったご指摘も受けまして、まずは多様な体験をしていただくためのいろいろなコースを、ICTを使って提供できるのではないかと考えています。

STEP 2のコース例については、例えば基本のコースとして、チュートリアルを設定しています。最近ゲームなどでも、始める前にちょっとした操作の練習みたいなことが必ず入ってくるのですが、博物館もかなり多様になっていますし、体験のしかたというのも変わってきていると思っています。名古屋市博物館では「こういったことが体験できます」、「こうするともっと楽しんでいただけます」、ということ、簡単な動画などで提供することを考えています。そのほか、「なぜ古墳はつくられたのでしょうか」、といった問いかけをして考えてもらうコースや、耳で感じる、触って体感するなどの基本のコース。右に行きまして、名古屋満喫コースは時代軸を串刺しにして、名古屋市のルーツを探検するようなものが各章にあります。観光地として「名古屋にはこんなところがあります」というのを歴史的に見ていくなどです。また、名古屋めしに関して、こんなものが名古屋独特の食生活や食材としてあるというのが分かるようなコースなどが考えられるのではないかと考えています。学校向けとしては、現在、市内の小学3年生が、むかしの暮らしや名古屋の移り変わりを学びにいらして、休館中も1月から3月初めまで来ていただいています。また、小学4年生や6年生、それ以外の学年でもできればつくっていきなさいと思っています。また、ICTだけではなく、これまでどおりの人と人の対話も大事だと思っておりますので、ボランティアガイドがコースを案内するため、「ここにガイドがおります」といった紹介も一緒に考えていけるのではないかと考えています。

また、お楽しみコースとして、例えば常設展で「この期間だけしか見られない資料がありますよ」とか、これまで様々な催しを一緒にしてきた名古屋市立大学のMAROという団体の皆さんの発案で、大学生が紹介するコースや大学生がお勧めするコース。また来館者から「自分はこのコースを見て楽しかった」、「自分のお勧めはこれだ」というのを提案いただいて取り入れるなど、双方向になるようなコースづくりもできるのではないかと考え

ています。

続いて5ページ、「市博で学ぶ！」になります。こちらは、展示図録の超詳細版のイメージです。大テーマ、中テーマ、小テーマ、資料の解説といった基本的なものに関しては、かなり階層ができますので、それらを文字データとして出していきます。データ化することで、自動翻訳や読み上げなどにも対応できる基本的なコンテンツになると考えています。これは全部見ていくとかなり分厚い本1冊分ぐらいの文字量になるかと思いますが、展示室の中からは2次元コードや検索などでたどり着ければよいと考えています。

最後6ページになりますが、こちらは、情報システムの構成です。説明は省かせていただきますが、基本的にはウェブベースで、世界とつながるということを考えています。

事務局：ありがとうございます。こちらについてのご意見をお願いいたします。

黒澤委員：まず一つ、ウェブベースということですが、館内はWi-Fiになるのですか。

博物館：現状としましては、一応できるだけキャリアのWi-Fiが入るようにしたいと思っています。あとは、名古屋市でNAGOYA Free Wi-Fiというのがありまして、それも入るようにはしたいと思っておりますが、30分で切れるので、どこまで賄えるかというのはございます。名古屋市博物館Free Wi-Fiというところまでできるかどうかは個人情報の取得など、いろいろ難しいところもございますので要検討と考えています。公の施設としては、なかなかハードルが高くなってきますので。

黒澤委員：そこをクリアしないと、ウェブベースができないので。あと、一つの手として、前にMieMu（※三重県総合博物館）で展覧会をやったときに、クジラ類の展覧会だったのですが、ところどころにQRコードがついて、本当に専門的な論文に飛んで面白いなど思いました。分からなくてもいいからこんな難しいことがあるんだというのを知るだけでも大した効果はあるだろうなと思っております。それは多分簡単なはずなので、ぜひ瀬川さんの論文などを。

黒澤委員：もう一つ、学校向けコースですけれども、どこでもそうなのですが、小学生までは皆さんよく考えるのですが、こちら小4、小6のコースがあって、次はお楽しみコース、大学生となって間がないんです。よく飛ばされるのが中学生なんです。小学生はすごく興味があるから、博物館に来て「これ、面白い」と言うのですが、年齢や思春期というものもあるので、中学生になるとぱたっと止まってしまう。それで後に続かないんですね。それが、やはり今、どうしようというところなどで言われ始めていると思うので、開館に合わせてそこまでやったほうがよいという話ではなく、非常に難しい問題があると思うので、検討課題として持っていてもらえればと思います。

博物館：ありがとうございます。今いろいろな学校等の方ともお話をしているのですが、少なくとも中高生が学校単位、学級単位で博物館に来るということは、ほぼ諦めております。その単位で動くことは、もうほぼないです。よほど近所であればよいのですが、少し離れると、もうコマの変更などが難しいということで、あとはどれだけ個人として、または先生の紹介で休みの日などに来てもらえるかということになるので、そこは本当に魅力的な楽しげなもので来ていただくようにするしかない。逆に、中学生の皆さん、ここで学んでくださいとすると多分もう全然で。もちろん歴史が本当に好きで興味がある方は来ていただけたと思うのですが、より多くの方をと思うと、工夫がさらに必要だなと思っております。

黒澤委員：そこで途切れてしまうというのはもったいないですよ。小学生のときはものすごくいろいろなことに興味があって、博物館でも食いついてくるのに、中学生になるとぱったり、そういう場もなくなるし、関心もなくなってしまいます。逆にそれって博物館的にも危機的状況ですよ。

博物館：それから、当初から現在掲げている案を行うには少し無理があるかなと思っております、システムの設計上は、できるだけ我々学芸員や博物館側でコースを増やせるようにしよう

と考えています。あまり凝ったつくりにはしづらいのですが、いろいろな資料を組み合わせ、ある程度自分たちでもできるものを基本にはつくろうと思います。そして、要所要所のつくり込んだものは、当初につくっていくという考え方をしております。

事務局：ありがとうございます。他はいかがでしょうか。

河西委員：2点ありまして、1点が以前も言ったかもしれないですが、今は高校1年生で歴史総合という授業が必修になっていまして、歴史を覚えることではなく調べることという話になっていて、博物館に行こうといったことが書いてあると思います。教科書によって大分話がまちまちなのですが、ただ覚えるというよりは、いろいろな所へ行こうといったことが非常に増えていて、学校単位では来られないのですが、それぞれ行くようにと先生たちが言うような構成に変わっていると思います。今の高校2年生ぐらいから、そういう素養がだんだんでき始めているということなので、そこを狙うようなものがつくれたらよいのではないかと思います。日本史も世界史も日本史探究、世界史探究ということで、探究コースはどちらかということ、地域の歴史をきちんと学びましょうということが学習指導要領に書いてあったと思います。地域の歴史ですので、それはそれで重要なのかなと思います。日本史・世界史の高校生のカリキュラムが随分変わっている印象がありますので、そこに対応するともしかしたらどっと来るのではないかと考えています。もう一つは、技術的な問題で、館内のウェブのコンテンツというのは、館内のWi-Fiがないと駄目なのではないかということを知りたいのですが、つまり限定の情報というのは、限定の場所にいないと入手できないのではないのでしょうか。大学の場合、自分の大学のWi-Fiにつながらないと、学内の情報が見られないようになっているのですが、そういう構成は取らないのですか。

博物館：それでは、2点目のほうからですけれども、今回は館にいる人向けといった制限はほぼ設けない予定です。

河西委員：制限はつけないのですね。

博物館：ですので、同じコンテンツを館内にいる人も館外にいる人も見られるというふうに考えています。

河西委員：展示の解説なども、外から見ようと思えば見られるということですか。

博物館：全部見られます。ただ、例えば投影と連動したものなど、その場でしか成立しないものもあるのですが、基本的には今ご説明している内容は、ほぼどこでも見られます。

河西委員：どこでも見られるのですね。来館しつつ見るけれども、外からでも、来館しなくても見られるということですね。

博物館：見られるということです。

河西委員：それはでも、よいのでしょうか。来なくてもよいと。

博物館：けちけちしません。

河西委員：なるほど。

博物館：結果どうなるかは本当に分からないのですが、学校団体は正直、中高生は難しいということで、諦めるという気はもちろんございませんので、ぜひ来ていただけるようにしたいと思っていますが、そういった中で、事前学習、事後学習という意味では、情報をほぼほぼほ出すことで、そこで調べていただく。恐らく以前、河西先生にご意見をいただいたと思うのですが、今の大学生はレポートも全部もうウェブで調べたりすると。

河西委員：本当にそうです。今、それを心配しているのですが。

博物館：以前お話いただいたことを覚えているのですが、それでも博物館はそういった文字情報を学ぶというよりは、ものから学んでいただくというのが本来的なものですので、文字情報でもういいやと思ってしまった人は来ないのは惜しいのですが、それでさらにものに興味を持っていただいて、見に来ていただけるような環境になるべきなのではないかと考えて

います。

河西委員：分かりました。

博物館：あとは、展示の魅力次第かと思っています。

河西委員：それでは我々のほうも、博物館を見てレポートを書いてこいというような、安易なレポートの出し方は駄目ということですね。

博物館：そうですね。

河西委員：我々のほうももっと考えていかないといけないですね。

黒澤委員：少なくともコピペできないようにしないと。

博物館：ただ、テキスト情報で持たないと、自動翻訳などに対応できなくなりますので、結局、文字情報は全て取れるようになってしまいます。博物館の出している情報が正しいかどうかは、見ていただいて。

黒澤委員：我々がレポートを博物館のウェブサイトで確認するということになりますね。

真島委員：今のお話の中高生向けについてですが、博物館と名古屋市にある中学校や高校が連携して、例えばこの博物館協議会のほうに出ている金城学院の校長先生や理事の先生方と最初にモデルケースみたいなものをつくってはいかがでしょうか。博物館に関心のある中高生たちを校内で募集してもらって、5～6人のグループで、実際にいろいろ探検してもらい、「こんなふうに学びました」とか、「こんなところが面白い」とか、自分の歴史探究的な要素や発見したことなどをつくってもらい、夏や秋のイベントなど、季節ごとにそれを募集していくこともできると思います。

リニューアルのコンセプトが、「未来の名古屋を共につくる」、「共創しましょう」というところなので、特に若い世代とか親子連れとか、いろいろな世代の人たちとか、障害のある方、外国にルーツのある方など皆さんで、自分たちの楽しみ方を紹介するとか、自分たちの歴史の学び方や面白さを伝え合うといった参加のしかたもよいのではないかと思います。名古屋市博物館の楽しみ方を同じ世代の皆さんに紹介するコーナーなどを、月ごとや季節ごとにリニューアルしていくのもよいと思います。みんなでこの博物館に愛着を持っていただく、一緒につくっていく、よりよくしていくといったところに参加できる。そういうスペースや空間、場をつくって一緒にできれば。私の推しの学芸員みたいな感じで、「この学芸員さんを通して私はこういう古代の面白さを学びました」、といったように高校生の目線で語ってもらったりすると、じゃあ行ってみようとなるのではないかと思います。そういう同世代の目線で、口コミが広がっていくとか、「あそこの学芸員さんは親切で面白いよ」とか「あの人は詳しくてこのことについて聞くといいよ」というのが、高校生の子たちから広がっていくとか、中学生の子が「自分はこんなことを知りたいと思っています」と紹介するなど。おそらくそういうことも考えていらっしゃると思うのですが、せっかく名古屋市にたくさん中学校や高校があるので、「アイデア募集を一緒にやりましょう」と呼びかけて、中学生、高校生の力で一緒につくったり、みんなです楽しむというのができるとよいなと思いました。

博物館：ありがとうございます。

真島委員：幼稚園なども一緒なのですけれども、お父さん、お母さんと一緒にとか、おじいちゃん、おばあちゃんと一緒に「こんな楽しみ方をしたよ」といった紹介や、外国にルーツのある人や外国人の観光客でもいいのですが、そういういろいろな人たちが自分の楽しみ方を紹介するというのが、多分一番伝わりやすいのかなと思います。そういうものを一緒につくっていけると、今日最初に館長さんがお話くださったこの名古屋の歴史文化から未来を創造する、共創するということにつながっていくのかなと思いました。

博物館：ありがとうございます。そっくりそのまま取り入れさせていただけるかと。繰り返しになりますが、こちらのシステムもつくってそれで終わりだと駄目だろうと思っておりますの

で、できるだけ更新をする中で、イベントなどでそういったものを取り入れていけるとよいなど、お話をうかがいました。ありがとうございます。

安井委員：よろしいですか。一応障害のある人の立場からというか、それだけではないと思うのですが、きっとお伝えになりたいことがすごくいっぱいあるんだろうなというのは感じるのですが、情報のキャッチのしかたは、好きで見ている人は自分から吸い込もうとしてくださるのですが、そうではなくてふらっと来た人や、障害によって情報を取りにくい人たちというのも想起していただきたいと思います。今点字ユーザーも大分減りましたが、例えば、点字は、長文をだらだら読むのは非常に苦痛なので、情報量が充実しているというのはすばらしいことなのですが、簡略にしないと理解がしにくい人たちもたくさんみえますので、それはお子さんも含めてだと思っておりますが、そういう視点は大事にしていきたいなと思いました。

例えば手話を映像につけてくださってすごくよいなど。これがあるとないとは大違いで、「ここに自分たちが来ていいんだね」という、寄り添う気持ちがきちんと伝わりますので、それはバリアフリーの大事な第一歩です。例えば、視覚障害の人は、映像が流れています、その映像に音が載っています、といった説明では実は不十分でして、シーンボイスガイドというものを御存じかどうか分からないのですが、通常流れている音声にプラスして、どんなシーンか、女性が何々していますとか、そういう説明の音声がついていると、ようやく映像の全体的な情報が入ってくると。ですので、なかなか通り一遍でないものは難しいところかもしれませんが、その辺りも情報提供させていただきま

すので、できる範囲の対応をしていただくと非常にうれしいと思います。それともう一つ、ボランティアさんについてです。私もボランティアさんの確保は毎回すごく難しいのですが、例えば博物館の中の展示物を紹介するというのもなかなか難しいことであると同時に、障害のある人が来たときの基本的な接遇方法というの、ぜひしっかり研修で、一通りの障害について行っていただきたいと思います。学芸員さんもぜひご参加いただいて、そこでまずウエルカムの気持ちが大変伝わり、それを知っている人と知らない人では大違いですので、そこはぜひお願いしておきたいなと思いました。

博物館：ありがとうございます。1点目についてももう一度お聞かせいただけますか。

安井委員：シーンボイスガイド、シーンをボイスでガイドすることです。視覚障害の人は、視覚情報も抜けているということなので、音声で補っている部分だけでは足りていないということ

博物館：動画にどのように取り込めるかでしょうか。オープンな場所で流れているというよりは、個別に聞かれるというのが想定になるのでしょうか。

安井委員：両方あります。小さい音で副音声流れていたり、視覚障害の人が見る映画の場合は、同じくらいの音で流れていたりとか。視覚障害がなくても高齢の人などにも、そのシーンで何が起きているのかというのを言葉、声で説明してもらおうとすごく分かりやすく、割と障害を飛び越えた効果もあるので、悪くない方法かなと思います。

黒澤委員：視覚障害者向けの解説文は、一度当事者にチェックしてもらったほうがよいですね。

安井委員：いろいろなボランティアの団体があって、映画にシーンボイスガイドをつけるという専門団体もあるので、そういうところにご依頼いただければ、特にそこまで細かくチェックまではしなくて大丈夫だと思います。

黒澤委員：シーンボイスではなく、普通の解説文についても文章そのものをチェックしてもらったほうがよいでしょうか。うちの場合はチェックしてもらいました。

安井委員：点字ですか。

黒澤委員：点字ではなく読み上げです。

安井委員：読み上げですね。

黒澤委員：我々が書いた文章だと、伝わらないところがありまして。

安井委員：さっきのルビ振りとも通じるのですが、言うなれば平仮名だけで言葉を理解していると思っていただくと。ですので、「英語を簡単にしましょう」というのと似ていますね。少し説明的な言い方にしたほうがよい場合もありますし、外国の人にも多分同じように聞こえてしまうのではないかと思います。

黒澤委員：そうすると晴眼者にも分かりやすいですね。

博物館：多分情報量としては本当に膨大になりますので、どこまでというのはありますが、いずれにしても実施段階のいろいろな場面でご相談はしないといけないかなと感じています。ボランティアに関しては、以前、各団体の方に来ていただいた際にも、やはり自分たち自身も経験が足りていないなと思いましたが、ボランティアも研修はしておりますが、その対応の研修というのを行っていませんでした。ボランティアは今一度解散しまして、またリニューアル前に団体をつくっていかうと思っておりますので、その研修の中では必ず取り入れていきたいと思っております。またご協力よろしくお願ひします。

黒澤委員：よろしいですか。5ページ下方のページ構成のところ、これから直されるのだと思いますが、平仮名と漢字の表記の揺れがあるので検討されたほうがよいと思ひます。例えば「旧石器時代のどうぐ」は平仮名ですが、高度成長のところは漢字になっていますね。平仮名と漢字の表記は結構悩ましいところがあると思ひます。「くらし」というのは本当に平仮名かなど。

博物館：ありがとうございます。まだその視点まで行き着けておりませんで、「くらし」や「どうぐ」の表記などは、最後の段階で統一していきたいと思ひます。

事務局：ありがとうございます。半田先生ももしご意見などあれば、お願ひできますでしょうか。

半田委員：ありがとうございます。ICTの技術というのは、日々どんどん進んでいるという中で、博物館の常設展示をはじめ、施設の中に装置として埋め込んでいくというのは、非常に難しい問題もあると思ひますが、皆さん、委員の方もいろいろとアイデアを出してきておられますね。従来の博物館に対するイメージは施設に来てくださる方々が利用者だということからなかなか抜け出せなかったものが、常設展示をリニューアルして、博物館を訪れることのない、また、これから興味を持っていただく、これから来館していただきたい人など、言ってみればステークホルダーが、どんどん裾野が広がっていく方向でお考えになっているというのは、本当に時流に合ったよい考え方だと思ひます。一方で、博物館の中にいる学芸員さんなどのマンパワーと労力が効率的に削減されるかという、そうではなくて、逆にどんどん増えていくと思ひます。ICTを担っていく、鮮度の高い情報を更新しながら発信していくということを、実際の運営に落とし込んで考えてみると、きちんと考えて、情報を公開していくスキルとノウハウを持っている人が館の中にいなければ回っていかないわけで、その辺もセットでリニューアル後の運営というものをしっかりと考えていくことが必要ではないかなと思ひました。また、ご意見にも出ていましたが、箱物としての施設のインフラ整備というのは不可欠で、Wi-Fiの環境も含めて、しっかり対応いただくというのがよいかなと思ひました。

もう1点付け加えさせていただきますと、今Z世代というか、もう生まれたときから周りにデジタルのハードやソフトがあふれている世代が、これからどんどん博物館の利用者になっていくという一方で、私もそうなのですが、高齢に差しかかかって日進月歩のデジタル技術の世界になかなかついていけない人たちとのマッチングということも考えていけないと思ひます。これからの博物館はアクセシビリティが非常に大事だと言われている中で、さきほどのお話にもありましたが、全ての人が同じ立場で博物館を利用していただけるオープン性みたいなところというのは、なかなか運用上は難しいとこ

ろも出てくるだろうと思います。ただ、アクセシビリティを確保し、全ての人に開かれた博物館を目指していくとすれば、そこにコストも生まれてくることは容易に考えられるわけで、今リニューアルの大体の姿が見えてきたところで、イニシャルからランニングを含めたコスト管理やマンパワーの配分、もちろん資金の調達確保というバランスも含めて、決してこれは今と同じでよいか、効率化が図れたから今より削減すればよいという問題ではなくて、目指すところを体現していくために、どこを充実させたらよいのかという方向で、ぜひガバナンスとマネジメントのレベルも考えていただく必要があるのかなと思ってお聞きしていました。

博物館：ありがとうございます。そうですね。デジタルを導入したから削減できるとは私個人は全く思っておりませんで、この情報量をまずはつくることから、かなり大変だなと思っております。またそれを更新していくというのも、難しいところがあるなと思ってます。ただ、今回、同時に資料に関してはデジタルデータベースを整えまして、そちらに資料の情報やキャプションの原稿などもある程度、主要なものは残し、情報をブラッシュアップしていきます。当初はそのデータベースとこちらのICTのシステムを連動させたいと思っていましたが、技術的な問題や個人情報の保護の問題などがあって難しいということが分かってまいりまして、こちらには手で反映させることになりますので、労力的にはかかってしまうなと思ってます。ただ、少なくとも一から原稿を書き、それを翻訳するというのではなくてきますので、その辺りはある程度スムーズに運営できていくのではないかと考えています。ソフトの部分に関しては、今後また検討をして、できるだけよい館になるようにしていきたいと思っています。

博物館：副館長でございます。今日いろいろお話いただいたのが、何か同じ共通のテーマに集約されてきたように思うのです。冒頭から外国人の話であったり、中学生、高校生という話であったり、障害者の話であったり、何か展示というのはコミュニケーションの一つの形だという考え方もあるようですので、我々が取ろうとしているコミュニケーションが、特定の成人であり日本人であり、障害がなくという人にしか響かないようではいけないよということを、いろいろな観点から委員の皆様方にご指摘いただいたのかなと思います。一つには、展示物にも我々のメッセージが込められているんだという、そういうストイックな考え方もあると思うんです。見に来て、これを感じてもらってなんぼですという考え方、かつてからあると思うのですが、やはりそれだけでは足りなくて、今言ったような外国人や中学生、高校生といった人たちが、日頃から何に関心を持って、日頃の生活で何に困っていてとか、そういうところまで思いを馳せないで、コミュニケーションが一方通行になってしまい、受け取るほうに響かないということになってしまうのではないかと。打開の方法としては、真島委員にご指摘いただいたように仲間内で広めてもらうとか、いろいろなヒントが今日の話に隠されていたように思います。

この展示が、間違いなくどこかの時点では完成するのですが、完成したからといって、我々職員が、「あとは見に来てくださいね」、「我々は調査研究も忙しいので、あとは立派な展示を見てやってください」みたいな感じになると、もう途端にコミュニケーションが途切れてしまって、さっき言ったような特定の人にしか響かないというようなものになってしまうと思います。どこかの段階で完成すると考えず、相手もどんどん変わってきますから、常に見に来てくださる人はどんな人なのかという関心を職員が失わないことなのかなと今日伺っていて思いました。ICTも大きな金額をかけてやるのですけれども、「この魔法の小箱があるからあとは大丈夫」、「もう外国人も障害者もオーケーよ」という考えになってしまうと、そこでぶつっとコミュニケーションが切れてしまうのかなと感じました。ありがとうございます。

黒澤委員：意見ではなく、情報提供なのですが、最近、博物館浴というのが話題になっていますが、

あれは九州産業大学の緒方先生が中心でやられていたもので、博物館の癒やし効果といえますか、リラクゼーション効果があるということで、血圧、脈拍が安定してくるというものです。今実証実験をやって医療機関との連携を図ろうとしているところですが、実はこの間、南山で一緒に行いまして、触る展示が通常の見る展示に比べて顕著に効果があるということが、緒方先生から送ってもらったデータで分かりました。私が前回の会議の冒頭で、触る展示というのは絶大な効果があるとお伝えしましたが、その効果の一つにリラクゼーション効果というのが挙げられます。これは、博物館に来てもらう、間口を広げるという意味で、非常に有効な手だてだと思います。もちろんなかなか博物館に来られない人に対する対応も必要ですが、やはり来てもらうにこしたことはない。そういう呼び水としても、うたってよいのではないかなと思いました。ただ、うちで学生向けに博物館浴、効果がありますと宣伝したら、博物館に足湯があると思って来る者が続出しまして、不思議なことを考えるなどちょっとこれは困りました。

博物館：ありがとうございます。先日、新聞でも取り上げられているのを拝見しました。

黒澤委員：そうですね、うちのが出ていました。

博物館：拝見しております。ああいった形で博物館の利用のしかたというか、活用のしかたというのはいろいろな観点があるのだなというのを、改めて勉強させていただきました。当館としましても、「触る」ということも今回企画しておりますし、もう少し運営のほうにも関わってくるかもしれませんが、人と人というのもやっぱり大事だろうと思いますので、その辺りも今後検討しながら、よりリラックスといえますか、いろいろと感情豊かになれるようなことができるかというのかなと思っています。

事務局：ありがとうございます。こちらで、本日の議題及び今までの全ての議題が一応終了となりまして、ありがとうございます。時間も少しありますので、最後に、2年間、5回にわたってご参加いただきまして、委員のみなさまから感想でも結構ですし、今のような参考情報というようなお話でも結構ですので、一言ずついただければと思います。お名前順で、河西先生からよろしいでしょうか。

河西委員：最初からすぐいろいろご検討いただいて、とてもよくなったのではないかと思います。私自身も考えていなかったようなことをいろいろと先生方からお話いただいて、なるほど、そういう視点があるのかとこの2年間、聞いていたのですが、それで随分よくなったなと思います。私自身、博物館はいつも利用者として見ているという感じで、ぜひたくさんの人にリニューアル後に来ていただきたいですね。しかも最初はメディアが取り上げますので、たくさん来ると思うんですね。それだけではなくて、皆さんの仕事を増やしてしまうようではあるのですが、もう1回来たいとか、何回も来たいと思うような何かをしていただければと思います。時代が移り変わるのが非常に早いで、常設展だからといってそのままではなくて、いろいろなところをリニューアルさせていかないといけないのかなとも思ったりしています。先ほど言ったように、歴史学の考え方も随分変わってきていて、またこの後、数年たって変わるのかなと思います。今は昔に比べると、覚えるよりも、まさに資料をどう読むかということになっていて、中学校、高校ぐらいからそういう教育を受けていく子たちが、もうそろそろ大学に入るようになってくるので、大分変わってくるのかなと思います。時代の流れみたいなことを少しキャッチしながら、ぜひ何回も来たくなるといふのを頑張っていたいただければと思います。

事務局：ありがとうございます。それでは、黒澤先生お願いします。

黒澤委員：この会議の最初のほうでも言いましたけれども、愛知県は県博がない県ですから、名古屋市博物館というのは県博としての意義もあります。愛知県に来た人はまず新幹線で名古屋に来るわけですから、そういう意味で名古屋市はもちろん愛知県全体のガイドンスになるような施設であってほしいなと思います。

それから、先ほど副館長さんもおっしゃいましたが、これまでの日本の博物館は、日本語を理解する健常者が、暗黙のうちに対象だったんですね。そこは打ち崩していくべきことなのだろうと思っていますので、そういう意味で、この名古屋市博物館がリニューアルしたところで、本当にそういう年齢とか性別とか文化的背景とか、心身の障害の有無にかかわらず、誰もが自由に利用できる場であってほしいなと思います。

それと、もう一つ具体的な話としては、私は展示室というのは、単に静かに見る場ではなくて、使うものだというふうに思っているんです。これはもうヨーロッパの博物館、美術館をみると、本当にもう展示室でいろいろなことをやっていますね。ですので、いろいろな展示を見る場だけではなくて、そこ自体がもう博物館なんだという発想で、いろいろな活動が展示室を使って展開されることを期待したいと思います。以上です。

事務局：ありがとうございます。半田先生、お願いいたします。

半田委員：今日は最後なので、名古屋にお伺いしたいと思っていたのですが、かなわなくて残念でした。申し訳ございませんでした。基本構想から実施設計まで含めて、当初、三芳館長の下で始まって、小林館長にお引継ぎになられて、今日最後の資料を拝見して、よくここまでお作りいただけだというふうに、大変喜んでいるところです。リニューアル後の名古屋市博物館に大いに期待をしたいと思っています。一方で、お話にも出ておりますけれども、これから30年、50年という先を考えてみると、やはり博物館という社会教育施設というか、今回文化施設としての役割も担っているという意味も含めた、社会資本としての博物館の役割というのが、もう劇的に変わっていく時代に入りつつあるという実感を私は持っています。黒澤先生のお話にもありましたけれども、どちらかというところ今までの博物館は、博物館の側が主観の主体となって、社会に何を伝えていくべきなのか、こういうことを伝えたいというものを展示にして、コレクションを形成して、調査研究をしてという活動をしてきて、催物とか事業の企画を立てる際にも、自分たちはどういう対象にどういう事業を行っていくのか、何が伝えたいのかということの主眼を考えてきた時代から、支えている主体自体が利用者にあるという時代に大きくシフトをしつつあります。その中で、今日もボランティアというキーワードがありましたけれども、ボランティアも含めて、非常に多様なステークホルダーの方々が、博物館の事業活動に関わることによって、自ら社会的な存在として成長していった、その先はそういう人たちが様々な形で主体となって博物館を支えていく。あるいは、自分たち以外の社会に、博物館の役割、名古屋市博の存在意義とか、レーゾンデートルみたいなものをそういう多様な主体の人たちがまた語っていただくということで、博物館がより意義のある社会資本として役割を担っていくという時代になっていくと思います。ぜひそういう形で、新しい時代の要請に応えていただけるような、名古屋博として成長していただきたいと切に願っております。

最後に、繰り返しになってしまうかもしれませんが、展示面積も増えました、内容も充実しました、ICT技術もふんだんに使いながらコミュニケーションツールも生かしていきますというところで、いよいよこれで計画が終わり、実装されたリニューアルでスタートをするわけですが、先ほど申し上げましたように、ランニングのコストは必ず増えると思います。マンパワー的にも拡充を図らなくてはいけない。専門技術やノウハウを持った方も博物館の中に取り入れて活動していかないと、なかなか社会の要請に応える博物館としての回しというのは難しいだろうという懸念も持っております。ですが、これだけの立派なリニューアルを成し遂げていただけたその先には、名古屋市及び博物館のマネジメントを含めて、その辺のことに目配りをしながら、現場の職員の方も、充実した仕事ができるような環境を整備していただくように期待を申し上げます。よろしくお願いいたします。

事務局：ありがとうございます。それでは、真島先生、お願いいたします。

真島委員：私は博物館のハード面の専門家ではないので、先生方や皆様からいろいろ教えていただいて、すごく勉強になりました。毎回充実した資料を丁寧に作っていただいたことで、いろいろな疑問点が解決されたり、新しい博物館像が見えてきたりして、すごく楽しかったです。この博物館が共創の拠点として、新たな名古屋の歴史文化を生み出していく場になっていくことを考えると、先ほど副館長さんもコミュニケーションの重要性や多様な人に響く場というお話をしてくださったのですけれども、外国のルーツがある方とか、障害を持っていらっしゃる方とか、中学生とか高校生とか、いろいろな人が交ざるグループワークを意図的につくっていただくとよいと思います。そこでは他者をまず受容しないとコミュニケーションは成り立たないので、どういう言葉をかけたらいいのだろうから始めて、いろいろな立場の人たちの話をお互いに聞き合う、そういった場になれるとよいと思います。リニューアルオープン後に、ワークショップに参加してもらい、多様な人たちがグループになって、まず感想から始めると、捉えが違ふんだということに気づくと思うんですね。同じ博物館、展示を見ても、小さい子はここに興味を持ったとか、中学生はここに興味を持ったとか、外国にルーツのある方はこういうところに興味を持ったと。一方で、そこに困り感があったとか、障害を持っている方はここがすごく見やすくて分かりやすかったと言っていたとか、いろいろな人たちの感じ方、考え方が、こんなに違って豊かなんだなということに参加者が実感し、学芸員の方などに上手にファシリテーターに入っていたら、いろいろな思いや考えを聞き、またそれを自分たちの展示とか、博物館の運営に生かしていく。何かそういう共に創る、共創的な場をつくっていくことが、新たな文化を生み出すとか、名古屋の歴史や博物館に愛着を持って、さっきおっしゃっていただいたような、博物館が意義のある社会資本として、存在意義を発揮していくといったようなイメージを抱きまして、すごく楽しみで、待ち遠しい思いです。ぜひそういう場に自分も参加して、いろいろな人たちのこの博物館に対する思いを聞いて、何か一緒につくっていけたらよいなと思いました。ありがとうございました。

事務局：ありがとうございます。最後に安井先生、お願いします。

安井委員：私も全く展示内容については素人同然なので、難しい場に来てしまったのかなと最初は思っていたのですが、実は私、この博物館で十何年ずっと作品展という舞台があって、毎回展示作業の仕事をしています。その間は、ふだんお目にかからないたくさんの方のある方が直接作品を持っていきますので、会って話をする機会も非常に多いので、その経験を踏まえてお話ししますと、障害のある方はなかなか実は本音を出されません。例えば、障害のある人と呼んで、ここもたくさんしてくださっていると思うのですが、実証実験しましょう、現地視察しましょうとなったときに、まずは御礼の言葉を言う人のほうがむしろ多いと思います。ですが、その後ろに割と本音は隠れていますので、その本音をお話してくれるようになるまで実はとても時間がかかるものでして、せっかくというわけではないのですが、まだこれから実際に博物館が出来上がるまでに時間があり、順番で進んでいくと思いますので、ぜひ現地に当事者を入れて、相談しながら進めていくというのを、出来上がりまでずっと続けていただきたいなと思います。この間、視覚障害のある人と話をしたのですが、まず障害のある人は自分の障害を受容する、受容という言葉も嫌いだけれども、受容するというのはすごく大変なのですが、博物館のガラスに触れると、もう1回何か思い知らされると、そういうお気持ちだというのを伺ったことがあります。それはもう最初からシャットアウトされた気分になるんです、という言葉がありまして、それはなかなか象徴的な話だと思いますので。本当に副館長さんの言葉を聞くと心強いなと思ひまして、これからも細かいところで対話を積み重ねていただければ、障害のある人は必ずこちらに行きたいなと思って

くれると思うので、もうしばらくなのですが、ぜひそれ続けていただいて、私も再びギャラリーが完成したときには、ここでまた作品展ができるとういなど思っていますので、本当にずっと注視して楽しみにしておりますので、よろしく願いいたします。

事務局：どうもありがとうございました。それでは、こちらで終了とさせていただきます。

最後に閉会の挨拶を木村副館長よりお願いいたします。

### 3. 閉会

博物館：皆さん長時間にわたりまして、どうもありがとうございました。思い返すと、令和4年の8月にこの会議がスタートしたということで、何となくその暑さが体感でよみがえってくるようで覚えているのですが、当時コロナの第7波と言っていたようで、1年半ぐらしかたっていないのですが、随分時間がたったものだなと思いました。皆様方から、この5回にわたってお話を伺うと、我々はこの資料を基に、これに対してどんなご意見をいただくのだろうと思いながら当日を迎えるのですが、当日を迎えると、もうはるかにこの資料を超えたところから、メタな視点に気づかされるというか、そこからご意見をいただくことが、本当に我々にとってどれだけありがたかったかということでございます。

この後は、令和9年に新しい常設展がオープンする予定でございますので、先生方もぜひお越しいただいて、皆さんからいただいたご意見が、このように反映されたんだ、よいプロジェクトに関わったものだなと思っていただけるように努力していきたいと思えます。どうもありがとうございました。

事務局：ありがとうございました。以上をもちまして、名古屋市博物館展示・収蔵環境等設計委託に関する検討会議を終了させていただきます。ありがとうございました。